

第2学年 組		芸術科(書道) 学習指導案											
平成 年月日() 第校時 教室 書道室		指導者 下田 章平											
単元名	臨書・鑑賞「小臣鶴儀尊」												
単元目標	○金文の鑑賞に基づき、表現を工夫しようとする。 (書への関心・意欲・態度) ○金文の技法をもとに、素材や表現を構想し、工夫することができる。 (書表現の構想と工夫) ○金文の臨書や摹書を通じて、効果的な表現の技能を身に付け表すことができる。 (創造的な書表現の技能) ○金文の諸要素を把握し、書のよさや美しさを感じ取っている。 (鑑賞の能力)												
単元の評価規準	書への関心・意欲・態度	書表現の構想と工夫	創造的な書表現の技能 鑑賞の能力										
	金文の鑑賞に基づき、その美とその技法に関心をもち、表現技法を身につけ、工夫しようとしている。	金文の技法をもとに、素材や表現を構想し、工夫することができる。	金文の諸要素を分析的に把握し、そのよさや美しさを感じ取っている。										
題材	『書道II』(東京書籍、47頁), 伏見冲敬『角川書道字典』(角川書店、1974), ワークシート												
単元について	<p>(1) 生徒観：本校の生徒は書塾等に通ったことのある生徒と、消極的に書道を選択した生徒に分けられるが、いずれにしてもこれまでに篆書を習ったことがない生徒ばかりである。前時までに金文の基本的な筆遣いを学び、おおむね理解できていると考えられる。しかしながら、金文は特殊な字形であるために、その把握が苦手な生徒が多いのが実情である。</p> <p>(2) 教材観：金文は楷書や行書の既習事項を踏まえるだけでは表現や鑑賞することができず、字形や技法も特殊である。ゆえに、ほとんどの生徒が手習いをしたことなく、どの生徒も新鮮な気持ちで取り組むことができる。また、篆書は字形と字源が密接に関わっており、表現と鑑賞の指導を関連させて行うことができ、かつ生徒が興味を持って主体的・意欲的に学習活動に参加することができる題材であると考える。</p> <p>(3) 指導観：字形は臨書よりも摹書の方が捉えやすい。まず摹書を通じてこれまで漠然と把握していた拓本の見方を学び、篆書の字形の細部(太細・曲直・方向等)まで正確に把握することができるとなり、臨書や鑑賞の理解も深めることができるとなる。</p>												
指導計画 (学習計画)	<table border="1"> <thead> <tr> <th>主な学習活動</th> <th>主な評価</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>1~4時 「小臣鶴儀尊」を1字ないし2字を半紙に臨書する。</td> <td> <ul style="list-style-type: none"> 金文の鑑賞に基づき、その美とその技法に関心をもち、表現技法の基礎・基本を身に付けていく。 (創造的な書表現の技能) </td></tr> <tr> <td>5時 「小臣鶴儀尊」を鉛筆で摹書する。</td> <td> <ul style="list-style-type: none"> 諸要素を分析的に把握することができる。 (鑑賞の能力) </td></tr> <tr> <td>6~7時 「小臣鶴儀尊」にある好きな4字を抜き出して臨書する。</td> <td> <ul style="list-style-type: none"> 金文の用筆や運筆に習熟し、意図する線質や表現効果を示し、紙面構成を工夫している。 (創造的な書表現の技能) </td></tr> <tr> <td>8~10時 金文の表現技法をもとに、「温故知新」を創作する。</td> <td> <ul style="list-style-type: none"> 金文の技法をもとに、素材や表現を構想し、工夫している。 (書表現の構想と工夫) 金文の美とその技法に関心を持ち、表現技法を身に付け、工夫しようとしている。 (書への関心・意欲・態度) </td></tr> </tbody> </table>			主な学習活動	主な評価	1~4時 「小臣鶴儀尊」を1字ないし2字を半紙に臨書する。	<ul style="list-style-type: none"> 金文の鑑賞に基づき、その美とその技法に関心をもち、表現技法の基礎・基本を身に付けていく。 (創造的な書表現の技能) 	5時 「小臣鶴儀尊」を鉛筆で摹書する。	<ul style="list-style-type: none"> 諸要素を分析的に把握することができる。 (鑑賞の能力) 	6~7時 「小臣鶴儀尊」にある好きな4字を抜き出して臨書する。	<ul style="list-style-type: none"> 金文の用筆や運筆に習熟し、意図する線質や表現効果を示し、紙面構成を工夫している。 (創造的な書表現の技能) 	8~10時 金文の表現技法をもとに、「温故知新」を創作する。	<ul style="list-style-type: none"> 金文の技法をもとに、素材や表現を構想し、工夫している。 (書表現の構想と工夫) 金文の美とその技法に関心を持ち、表現技法を身に付け、工夫しようとしている。 (書への関心・意欲・態度)
主な学習活動	主な評価												
1~4時 「小臣鶴儀尊」を1字ないし2字を半紙に臨書する。	<ul style="list-style-type: none"> 金文の鑑賞に基づき、その美とその技法に関心をもち、表現技法の基礎・基本を身に付けていく。 (創造的な書表現の技能) 												
5時 「小臣鶴儀尊」を鉛筆で摹書する。	<ul style="list-style-type: none"> 諸要素を分析的に把握することができる。 (鑑賞の能力) 												
6~7時 「小臣鶴儀尊」にある好きな4字を抜き出して臨書する。	<ul style="list-style-type: none"> 金文の用筆や運筆に習熟し、意図する線質や表現効果を示し、紙面構成を工夫している。 (創造的な書表現の技能) 												
8~10時 金文の表現技法をもとに、「温故知新」を創作する。	<ul style="list-style-type: none"> 金文の技法をもとに、素材や表現を構想し、工夫している。 (書表現の構想と工夫) 金文の美とその技法に関心を持ち、表現技法を身に付け、工夫しようとしている。 (書への関心・意欲・態度) 												

本 時 案 (第5時)		
本時の目標	○金文の諸要素を分析的に把握することができる。 ○摹書を通じて金文の字形やその構成を身に付けることができる。	
学習活動	指導上の配慮事項など	評価・方法など
1 本時の学習内容と評価のポイントを把握する。	<p>○本時の学習内容と評価のポイント（下記）を、配布プリントで提示する。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 5px;"> 評価のポイント <ul style="list-style-type: none"> ①字形を正確に摹写することができる。 ②始筆や終筆の部分での太細の変化を注意して模写することができる。 ③拓本の文字部分とその欠損部分を正確に見分けて摹写することができる。 ④拓本の欠損部分を字書や重複する文字を参照しながら、復元することができる。 </div>	
「小臣鯨犧尊」を鉛筆で摹書し、分析的な鑑賞態度によって字形を正しく把握しよう。		
2-1 拓本についての理解を深める。	○採拓について説明した上で、教科書をもとに、文字部分及び欠損部分が白色、そうでない部分が黒色で示されることを確認する。	○金文の諸要素を分析的に把握することができる。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 5px;"> 一努力を要する生徒への手立て一 机間指導をしながら、分析の視点を具体的に示して理解を促す。 </div>
2-2 トレーシングペーパーを教科書の上に添付し、鉛筆で拓本の文字を双鉤（文字の輪郭の縁取り）を行う。	○拓本の文字が不明瞭な部分は、周囲の生徒と話し合ったり、伏見沖敬『角川書道字典』（角川書店、1974）等を用いて復元するように指導する。	
2-3 トレーシングペーパーを教科書から取り、拓本と対照させながら、双鉤の中を塗墨（文字の輪郭内を黒く塗る）する。	<p>○塗墨に際しては、もう一度拓本と対照し、双鉤の誤りを見ながら、塗墨するように指摘する。</p> <p>○隣の生徒とトレーシングペーパーを交換し、互いに字形が正しく把握できているかどうかを確認するように促す。また、必要に応じて机間指導する。</p>	○摹書を通じて金文の字形やその構成を身に付けようとしている。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 5px;"> 一努力を要する生徒への手立て一 机間指導をしながら、双鉤や塗墨の方法について、具体的に助言する。 </div>
3 ワークシートに自己評価を記入し、本時の授業を振り返る。	<p>○進度が速い生徒には、拓本を見ながら、全臨（すべての文字を臨書する）するように促す。</p> <p>○感想部分は箇条書きでなく、文章で具体的に書くように促す。</p> <p>○授業後に感想に書かれた生徒の気付きや質問に対してコメントを施し、また、本時の到達点や次時の課題を示す。</p>	